



豊後・杵築藩から献上用梅壺の注文 ～梶原忠蔵と黒牟田山～

黒牟田・梶原志津代さん宅には、梶原家の先祖が江戸時代の文化年間、豊後（現在の大分県）杵築藩から注文を受け、その製品を届ける道中に使用した木札が残っています。3枚の木札（縦66cm 横15cm）で、表面には「献上壺 松平志摩守用物」、裏面は「賄奉行 元田甚右衛門 木元尉右衛門 三隅四郎助」と墨書され、2点目には「献上壺 松平市正用物」「賄奉行 渡辺八郎治 大山四五六 伊東三郎助 富来勝太郎 阿部五六七」3点目「献上壺 松平河内守用物」「賄奉行 渡辺八郎次 荷宮吉左衛門 大山四五六」とあります。これらは杵築藩8代藩主松平親明と9代親良、10代親貴と思われます。

『皿山代官旧記覚書』によれば、今からちょうど200年前の文化9年（1812）、黒牟田山の梶原忠蔵は、杵築藩松平家の依頼により、同家から將軍家へ献上される梅干壺を焼いて納め、その功績によって三人扶持を与えられたとあります。さらに『代官旧記』の文化11年（1814）には「御献上之五升入之梅壺」を毎年4本ずつ焼いて納めたことが記されています。

この史実は豊後側にも残っており、面白い事にその文化15年（1818）4月8日付け『御用所日記』には「肥前唐津献上御壺師梶原忠蔵」とあって、有田皿山（佐賀本藩）の人が唐津（天領）とされ、この時差しだった11個が出来なかったため、焼き直しを命じられています。これがすべて献上品として用いられたのではなく、恐らく控えのための品も含めての11個だったと思われます。

献上用の製品と思われる梅干壺が、現在杵築城に収蔵展示されています。もともとは松平家の菩提



染付唐草文大壺(杵築城展示)
写真提供：山口信行氏

寺・養徳寺に伝世したもので、蓋を含めた高さが43.0cm、壺本体の高さは32.2cmで、梶原家が作った容量5升の壺に想定できます。

ところで、『代官旧記』には文化7年ごろの黒牟田山の状況について「黒牟田山之義、年を追極難二付、陶器方へも段々御助成を相願候」と、地区全体が大変な状況に陥っている様子を伝えています。その結果、藩への借金もこれ以上は無理なので、内外皿山の窯焼きや商人に講を仕立てて金を用立たせ、借金返済を延ばす代わりに、朝夕の暮らし方も「塩さしめし」で着物も粗末にし、酒は一日にいくらと定め、先祖の年忌供養も先延ばして、女共の茶合（茶講か）も止め、ひたすら昼夜を通して働くようにとの達し書きが集落の入り口に立てられたとあります。

そういう社会状況にあって、他藩からの注文に挑んだ梶原忠蔵とは一体、どのような人物だったのでしょうか。『肥前陶磁史考』には、石場の陶石分配を巡って内・外山でひと悶着があった折、「豊後杵築藩の御用窯とてやや学識あり、且頗る能弁であった」忠蔵は内山側の理不尽を、理路整然、滔々と論難したとあります。皿山代官の「汝余りに長廣舌なり、止めずんば一刀にて切り捨てん」という威嚇に対し、忠蔵は「直に己が首を差し伸べ」たという逸話を記しています。

その後、黒牟田山といえば大物作りの陶業地として、有田皿山の中でも中心的な役割を担うようになるのですが、同じく『肥前陶磁史考』には、忠蔵による2尺5寸（約60cm）の大鉢製作がその始まりとしています。

社会的に困難を極めた時代、積極果敢に新しい技術に挑んだ先人がいたことを、これら残された資料が今に伝えています。

（尾崎葉子）



杵築藩献上壺道中木札（梶原家所蔵）



梶原家の梅壺については『有田町史 陶業編Ⅰ』にあります。ほかに『九州陶磁文化館 研究紀要 第3号』には大橋康二氏による「將軍家献上以外の特別な意味を持つ肥前磁器二題～禁裏御用陶器と梅干用壺」、杵築市教育委員会の吉田和彦氏による「杵築藩の例年献上梅壺」に詳細が記されています。

皿山

季刊

No.93

春
2012

有田町歴史民俗資料館・館報

太平洋を渡った有田焼 (下)

オアハカの町並み

メキシコ出土の有田焼

2006年から2010年まで3回にわたってメキシコで出土した有田焼の調査を行いました。訪ねた町は、前回89号で紹介したクエルナバカ、グアダラハラその他、メキシコシティ、プエブラ、アカプルコ、オアハカ、ベラクルスなどです。その中でメキシコシティ、オアハカ、ベラクルスの3都市で、有田焼の出土品を確認しました。それらを順に紹介していきましょう。

メキシコシティ Ciudad de México

メキシコの首都であり、昔も今もメキシコの政治、経済の中心です。アステカ王国時代は、テノチティトランとよばれ、湖に浮かぶ壮麗な都でしたが、1519年にスペイン人のエルナン・コルテスのメキシコ征服によって破壊され、かつてのテノチティトランの中心部がそのまま現在のメキシコシティの中心部となっています。

さて、メキシコシティでは約80点の有田焼の出土品を確認しています。その多くは染付芙蓉手皿とチョコレートカップです(写真1)。いずれも有田、特に内山地区で焼かれたものばかりです。2004年から2005年にかけてガレオン貿易のアジア側の出発点であるフィリピンのマニラの出土品の調査を行いました。その時は外山地区の製品も数多く見られましたが、有田以外の波佐見焼な

どもありました。つまり、マニラからメキシコに向けて積み出すにあたって、肥前の陶磁器の中でも良質な内山地区のものを選んでいることがわかります。

カサ・デル・リスコ Casa del Risco

メキシコシティ郊外のサン・アンヘラ地区の旧宅には、壁面に陶磁器片や貝殻片を埋め込んで装飾した噴水施設が残っています(写真2)。現在はカサ・デル・リスコ博物館として公開されています。

埋め込まれた陶磁器片の多くは地元のタラベラ(プエブラ)焼、マヨリカ陶器、中国磁器などですが、よく観察すると有田焼の破片も見つけることができます。染付芙蓉手皿、染付壺、染付山水文皿、色絵チョコレートカップ蓋などです。もし行かれる機会がありましたら、有田焼を探してみてください。(ただし、双眼鏡が必要です。)

オアハカ Oaxaca

メキシコシティからバスで7～8時間揺られると、オアハカです。市内の歴史地区や郊外のモンテ・アルバン遺跡が世界遺産に登録されている観光都市です。

2010年に訪れた時は、「死者の日」(11月2日)の頃でした。日本で言えばお盆のようなものです。ドクロが町中にあふれていますが、雰囲気はあまり暗くありません。



写真1 メキシコシティ出土の有田焼
染付芙蓉手皿(右側)、染付と色絵のチョコレートカップ
(提供: テンプロマヨール博物館)



写真2 カサ・デル・リスコの噴水の装飾
陶磁器と貝殻などで埋め尽くされている。注意深く観察すると、有田焼も確認することができる。



写真3 オアハカの「死者の日」

町中にドクロがあふれているが、重苦しくはなく、雰囲気はハロウィンに近い感じがする。



写真4 ベラクルスのサン・フアン・デ・ウルア要塞

1582年に島の上に築かれた要塞。眼前に大西洋（メキシコ湾）が広がる。

ん（写真3）。

町の中心のカテドラル（大聖堂）の北側にサント・ドミンゴ教会があり、この修道院跡の発掘調査で有田焼が数多く発見されています。小さな破片まで含めると、約120点見つかっています。そして、教会に隣接するオアハカ文化博物館には出土品が展示しており、2010年当時は有田焼の染付チョコレートカップ、瑠璃釉チョコレートカップ、染付碗が展示されていました。

チョコレートカップという言葉が何度か登場しましたが、太平洋を渡った有田焼の主力製品のひとつがチョコレートカップでした。今はあまり見ませんので、形が思い浮かばないかもしれませんが、コーヒーカップやティーカップに比べて、背が高いカップで、18世紀の絵画などにも描かれています。また、チョコレートカップに把手が一般的に付くようになるのは18世紀中頃のことで、有田焼が盛んに輸出されていた17世紀後半～18世紀前半にはまだ把手がつかないものでした。

メキシコではカップ類の大半がチョコレートカップです。これほど片寄って出土する地域は他にあまりありません。チョコレートの原料のカカオの栽培原産地であり、当初、スペインがカカオ貿易を独占していたこととも関係があるのでしょう。インド洋が「茶の道」であったなら、当時のガレオン交易路は「チョコレートの道」であったと言えます。

ベラクルス Veracruz

大西洋側のメキシコ湾に面した港町です（写真4）。スペイン植民地時代には大西洋側の貿易港として栄えました。スペイン本国からメキシコへの物資は、この港に荷揚げされていましたし、メキシコからスペイン本国へ向かう船はこの港から船出していました。

ベラクルスについては、アジアからの荷揚げ地である

アカプルコとともに、非常に関心をもっていました。というのもマニラからメキシコに渡った有田焼がさらに大西洋を渡ってスペインに運ばれていたかということを知るためには、ベラクルスの調査が不可欠だったからです。

その結果、ベラクルス市内から出土した陶磁器片の中から5点の有田焼の破片を見つけることができました。また、最近では大西洋を隔てたスペインの方でも有田焼が出土していることがわかっています。田中恵子さんがカディス博物館に所蔵されている有田焼の出土品を紹介しています。ちなみにこれもチョコレートカップです。

中米、カリブ海、南米大陸へ

メキシコ以外でもグアテマラのアンティグア、キューバのハバナで有田焼が出土しています。これらも太平洋の波濤を越えてアメリカ大陸へと渡ってきたものでしょう。アンティグアでは染付芙蓉手皿と染付や瑠璃釉のチョコレートカップ、ハバナでは染付チョコレートカップが出土しています。おそらくスペイン植民地時代に栄えた都市を発掘すれば、多くの場所有田焼が出土すると思います。まだ出土は確認されていませんが、南米のペルーでも有田焼の染付壺が伝世しています。南米大陸にまで有田焼が流通していたことは間違いありません。

有田焼は工業製品として日本で最初のグローバル商品であったと言っても過言ではないと思います。最近やや元気がないところもありますが、近代以降、貿易立国、技術立国として歩んでいくこととなる日本の輸出産業の先駆けとも言えます。

4年後の2016年には、有田焼創業400年を迎えます。それまでにアジア、ヨーロッパ、北中米、南米、そしてアフリカの五つの大陸に渡った有田焼の足跡を辿り、改めて400年間の先人の功績を振り返りたいと考えています。
(野上 建紀)

「有田皿山ば 歩こう隊」の成果を学校へ



展示を見学する子どもたち
(曲川小学校)

花王コミュニティミュージアム・プログラム 2011 の助成事業「150 年前の有田皿山ば 歩こう隊」(NPO 法人アリタ・ガイド・クラブと共催)の活動は、いよいよ 3 年目に入りました。過去 2 年間の活動の中で、参加者の多くからあがった意見は、次世代を担う子どもたちに是非有田の素晴らしい歴史を知らせたいというものでした。そこで、3 年目の活動として、まず町内各小中学校に 2 年間の成果をパネルにして校内に展示しました。

さらに、学校の長期休暇を中心に、スケッチ会や歩こう隊子どもバージョンを実施しようと計画中です。学校を通じてチラシを配布していますので、親子揃って参加ください。

詳しくは有田町歴史民俗資料館 (☎ 43-2678) までお問い合わせください。

文化財防火デー開催



毎年 1 月 26 日を中心に、全国で文化財防火デーにちなんだ取り組みがあります。これは昭和 24 年、修復中だった奈良・法隆寺金堂の壁画が焼失してしまったことにちなみ、大切な国民の財産である文化財を守ろうということで実施するものです。

有田町教育委員会では 1 月 22 日(日)、大木宿の竜泉寺境内で訓練を実施しました。大木地区の住民の方々にもご協力いただき、有田消防署、有田町消防団に消火作業をしていただきました。その後、消火器を使っの訓練では子どもたちも参加。各家での火災報知機の設置などの話を聞いて訓練は無事終了しました。

竜泉寺は山門や、懸仏、初代金ヶ江三兵衛を記した過去帳などの貴重な文化財を所蔵されています。さらにここは雨乞い祈願のお寺でもあります。過去何度かここでの訓練を計画しましたが、その多くは雨や雪というまさに靈験あらたかなお寺で、今回も小雨降る中での訓練でしたが、ご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。



山門(町指定文化財)に向かったの放水活動

町家で昔話を聞く会 開催



2 月 4 日(土)、春を待ちわびる時期の恒例行事となった「町家で昔話を聞く会」を、有田町公民館との共催で本幸平の異人館(田代家所有)を会場にして、開催しました。

今までは伝統的な町家での開催でしたが、今回は明治 9 年に建設された洋風建築のお宅です。お話ボランティア・ひこうせんの方々に、建物にふさわしい内容にしましょうと選んでいただいた「ししときつね」や「ヤクーバとライオン」のほかに、有田の伝説「黒髪山の大蛇退治」などを話していただきました。

建物の中に初めて入ったという子どもたちも多く、ステンドグラスの窓やらせん階段など、珍しそうに見入っていました。

ちょうど立春の日でしたが、前日の雪が溶けきらない寒さの中、昔の人が暖をとった火鉢を準備し、炭を燃やして昔の暮しも体感してもらいました。

快く会場を貸していただいた田代家の皆様に感謝申し上げます。



季刊『皿山』

通巻 93 号 (平成 24 年 3 月 1 日)

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山 1 丁目 4-1

☎ 0955-43-2678 FAX0955-43-4185